

# 強きと単純作業で築いたすごい経営

菊池郡旭志村いはぎ牧場

優しい自然とであえる小さな村、旭志村。世帯数1,400戸、人口5,600人。

家畜は、乳用牛6,000頭、肉用牛15,000頭、豚25,000頭を数え農業粗生産額は、旭志村の90%を占める。まさに **日本一の畜産の村** である。県内のシェアは、乳用牛10%、肉用牛20%、豚10%。ここに、強きと、単純作業で築いてすごい経営の **いはぎ牧場** がある。



いはぎ牧場全景

## かくし玉が暴落をささえた

ご主人は、昭和38年、菊池高校を卒業。卒業と同時に、搾乳素牛の育成をはじめた。当時の経営は、米70a、麦、それに赤牛1頭の規模であった。

昭和45年、搾乳素牛の育成は11頭になっていたが、もっとダイナミックな経営をと翌昭和46年6月、近代化資金140万円を借入、肥育舎（80頭）を建設、本格的に肥育事業に転換。肥育素牛も80頭揃ったが、翌昭和47年、200頭規模の牛舎を建設、現在地に移転した。最初の80頭牛舎は、隣接する姉夫妻に同額で引き取ってもらっている。肥育素牛は、すべて農協寄託牛ではあったが、一挙に200頭になった。

一方、かくし玉として、くぬぎ山に50頭を放牧していた。肥育牛は、暴騰の一途をたどっていたが昭和48年11月、例の石油ショックである。牛は、暴落し、農協の手書き精算書をみると1,800万円の赤字であった。かくし玉は、逆に裏目となってしまった。

暴落後、農協の指導で、放牧をなくし、頭数も150頭に縮小制限された。しかし、自己資金で別にかくし玉を40頭確保。これがあたり、肉価格も安かったが、素牛も安かったこともあり翌昭和49年10月末には、1,800万円の全額を返すことができた。

翌50年、再度の暴落を心配し、恐ろしくなったこともあり、一瞬ではあったが100頭までに縮小した。その後徐々にではあるが、200頭の規模には回復した。生活は農協から販売肥育牛一頭当たり3万円の平均払いで頑張り、残金は、すべて素牛代、餌代として差引いてもらい、一時的には、無借金とまでなった。

## つぎつぎに畜舎（自己資金）を建てる

畜舎は、昭和58年80~90頭規模、800万円。平成2年150頭規模1,600万円。すべて自己資金である。特に、平成2年に建設して、150頭規模畜舎は、翌年の台風19号の被害にあい、補修に400万円が掛かっている。扇風機等の内訳施設も含めると、被害額はもつとふえる。

現在、頭数は420頭。半分はF<sub>1</sub>。年間出荷頭数は、280頭。このうちF<sub>1</sub> 60~70頭。平成7年は、F<sub>1</sub>が倍增する。平成5年の総売上げ、1億4,000万円。格付は、F<sub>1</sub> A<sub>3</sub> 80%以上、ホルスは、B<sub>3</sub> 25~30%。平成5年10月以降、F<sub>1</sub>の格付は変わらないが、ホルスは落ちている。殆どの肥育農家も同じ傾向にあるが、まだ、原因はわからない。素牛は、ホルスは、地元であるが、F<sub>1</sub>は、毎月10頭岡山県から導入している。



肥育牛舎



肥育牛群

## 餌は、肥育後期を除き配合飼料

えさ  
餌は、とにかく単純作業とするため、F<sub>1</sub>の肥育後期を除き、配合飼料だけである。

肥育前期、中期は、全農の肉質重視型肉牛生産システムの給与。

F<sub>1</sub>の肥育後期は、配合主体に、二種混の単味をすこし、加えている。

粗飼料は、以前、いならだけを給与していたが、最近とても足りなくなってきたので、ヤン草、ヘイキューブ等を購入している。畑は空いているが、粗飼料の作付はせず、ふん尿の処理と、雑草が生えないように耕起だけをしている。

旭志村は、配合飼料の大消費地帯のため大口奨励金等の恩恵もあるが、個人的にも月間100tを超えると、なお、トン当たり1,000円の奨励措置がある。

このためもあり、今年度、新に100頭規模の畜舎を建てる予定。

毎日の作業は、妻と長男（24才）と3人で働いているが、朝は9時～12時、夕方は、3時～5時（夏は4時～6時）まで、暗くならないうちに帰ることにしている。



配合飼料の給与状況

## ● 哺育一貫は、あわない

素牛は、ホルス 5カ月令250kg・F<sub>1</sub>5カ月令210kg程度で購入している。いままでは、素牛代が、F<sub>1</sub>と、ホルスとかわらなかつたから、F<sub>1</sub>がよかつた。

現在では、ホルス6~7万円、F<sub>1</sub>17万円と、高騰している。ホルスの素牛の場合、哺育育成農家には、安定基金の発動もあるが、肥育農家は6万円程度で買うことができるので、哺育牛は、導入しない。5カ月間の手間がはぶけるし、当牧場においては、哺育一貫はあわない。

平成6年には、導入素牛のうち6頭の事故もあつたが、導入時に悪い子牛は、獣医師に診てもらつても、殆ど採算にあわないので、家畜共済にも加入していない。

## ● 一括販売

出荷の目安は、ホルス去勢が13カ月、740~750kg。F<sub>1</sub>20カ月770~780kg。と月令を基準に一括出荷販売。

価格は、ホルスで300千円/頭、F<sub>1</sub>500千円/頭。一番気になるのが、出荷が2~3頭残っていること。これは、計画的に導入できないし、肥育部屋がもつたいない。

出荷は、導入計画に合わせ、一括販売し、飼料代もそのつど精算している。敷料は、もちこみ約12m<sup>3</sup>、33,000円。敷料の交換は、1カ月に1回。夏場は、ホコリがするからもつともつと長くなる。肥育の格付成績をあげるためには、もつと、はやめの交換が必要となる。

堆肥は、とりにくる人に、2トン車1台2,000円で販売しているが、処理しきれないぶんは、業者に無料で譲っている。10t車70台ほどになることもある。

## ● 「牛」以外は危ない

本格的に肥育事業にとりくんでから平成5年まで畜舎周辺に3haほどの農地を購入されているが、いまでは、殆ど使いみちがない。

この投資も約3,000万円。

牛は、なんとかわかるのでそう問題はないが、他の投資は危ない。

今年は、新に100頭規模の畜舎を建設予定であるが、この建設費1,000万円、牛100頭分、2,000万円、合計3,000万円の投資になる。

これも、自己資金の予定。まさに、強きと単純作業で築いたすごい経営といえる。